

講演題「『助けて』と言える国へ ―助け合い社会の創造に向けて―」

2014年4月12日 地区大会講演

NPO 法人北九州ホームレス支援機構 理事長

東八幡キリスト教会 牧師

奥田知志

【講演の要旨】

1、はじめに

この度は、国際ロータリークラブ第2700地区、地区大会の開催おめでとうございます。また、このような講演の機会をいただき本当にありがとうございます。ロータリークラブの皆様には日ごろからのご支援をいただき心より感謝を申し上げます。

私たちは、北九州市、下関市、そして福岡市においてホームレス状態になった人々の自立の支援を行ってきました。今年で活動開始25年になります。これまでに支援を受けて自立をされた方は、2000名を超えました。半年間の自立プログラムで居宅設置、再就職などの支援を行いますが、自立達成率は93%、自立生活の継続率は95%を維持しています。支援があればもう一度立ち上がることができる人は少なくありません。

ロータリアンのみなさんが、大切にされている「4つのテスト」の第二の問いは「みんなに公平か」であったと思います。私は「公平な社会」とは何かを考えながら困窮者の支援活動を行ってきました。しかし、残念ながらこの社会は「公平」とは言えません。ホームレスや生活困窮状態の若者、罪を犯してしまった人々、さらに貧困の世代間スパイラルの中で苦しむ子どもたち。このような人々が置かれる現実とは、とても「公平」とは言えないものです。

貧困もホームレスになることも「その個人の問題」、あるいは「自業自得」と思われがちの事柄ですが、実際には個人の問題では済まない社会の現実があります。貧困や困窮は、必ずしもその個人にだけ起因するものではありません、経済の流れ、社会保障制度の在り方、そして、何より地域における人のつながりなど、この社会そのものが生み出していると思えてならないのです。ですから、困窮者支援においては、目の前の困窮する「個人に対する支援」と共に、この社会自体をどのように再創造するのかという「社会に対する取り組み」が問われているように思います。

私たちの支援活動を指して「社会復帰支援」とよく言われます。確かにそうなのですが、一方で「復帰したいような社会であるのか」という問いは残ります。この社会自体が不公平であるならば、困窮者をその社会に戻したところでまた新たな困窮者が現れるに過ぎません。ロータリークラブが目指しておられる「職業奉仕」にしても「社会奉仕」、あるいは「国際奉仕」なども今以上に「公平な新しい社会に向けた創造的奉仕」なのだと思います。故に私たちは、困窮者支援を二つの方向性を持って進めてまいりました。それは「対個人」を原点に据えつつ、「対社会」という創造的活動であることでした。

2、困窮者支援の視点

25年前、北九州においてホームレス支援が始まった時以来、支援活動を支えた視点は「ハウスレス」と「ホームレス」ということでした。「ハウスレス」は「宿なし」に象徴される経済的、物理的貧困を意味していることばです。野宿者に対する自立支援の場合「失業と住宅喪失」が中心課題となってきました。

しかし支援の現場においては「ハウスレス」の解消だけは済まない事態が起こっていました。それが「ホームレス」問題です。「ホーム」は「ハウス」とは違います。「ハウス」が経済的、物理的課題を意味するのに対して「ホーム」は「関係概念」であって「ホームレス」とは「無縁」状態を示すことばなのです。路上の時には、「畳の上で死にたい」と仰っていた方がアパート入居されます。畳に上がったわけですから、これで安心となるかというそうなりません。「俺の最期は誰が看取ってくれるだろうか」という次の問いが始まります。しかし、これこそが人間的な問いであるわけです。現在は、野宿者に限らず、多くの人がホームレス化した無縁社会に生きています。このことに対応できる仕組みが現在必要となっています。

「自立が孤立に終わらない」ことが重要です。野宿者支援においては「この人には今何が(家、食物、仕事などハウスの課題)必要か」と共に「この人には今誰が(家族や友人などホームの課題)必要か」という二つ問いが重要でした。

ある時中学生によるホームレス襲撃事件が多発しました。被害者の親父さんから「何とかならないか」と相談を受けました。しかし、その時被害者である親父さんは私に被害を訴えながらもこう言うのでした。「考えてみれば夜中の1時、2時に町をウロウロして野宿者を襲撃している中学生というのは、家があっても帰るところがない、親はいても心配してくれる人がいないんじゃないか。そんな奴の気持ちは俺はホームレスだからわかるけどなあ」。襲撃する中学生にも、襲撃されるホームレスにも、帰るところ、心配してくれる人、すなわち「ホーム」がない。ここに問題の本質がある、すなわち「ハスレス(経済的困窮)」のみならず「ホームレス(関係の困窮)」があると気付かされた事件でした。

「絆」が大事であることは皆が知るところです。「人はひとりでは生きていけない」という認識も多くの人が共有している事柄です。しかし問題は、ではそのような課題に対してこの社会をどのように再構築するのかということが追いついていないということだと思います。

3、絆は傷を含む

震災直前の2010年12月。ある児童相談所にランドセルが届けられるということが起こりました。その後、そのような寄付が全国に広がり『タイガーマスク現象』と呼ばれる運動に発展しました。このこと自体、素晴らしいことだと思います。

しかし、一方で少し気になるのは「なぜ匿名であったのか」と言う点です。当然、チャリティーにおける匿名性の担保は重要なことです。しかし、一方で匿名にとどまる限り、直接子どもたちと会っていないのではないかと私には気になります。これはタイガーマスク現象に限らない話ですが、現代社会は「直接出会うこと」を忌避する社会であると思います。「困っている人に何かしたい」という思いとは裏腹に、直接出会うと面倒くさい、あるいは傷つくのではないかと危惧があるのも事実です。確かに、人は他者と出会うことでそれまでの自分とは違う生き方を迫られます。人は出会いによって変えられていくのです。それは時としてつらいことでもあります。この変化を恐れると私た

ちは誰とも会わない方がいい、出会わない方がいいということになり、無縁社会はますます深刻化します。だから絆が大事です。しかし、そもそも絆(きずな)という字には「きず(傷)」が含まれています。それは事実なのです。社会とは人と出会い、健全に傷つくための仕組みです。その社会が崩壊しつつあるのです。自らが傷つくことを恐れるあまり、無縁が深まっていく中で、困難を抱えた人々は一層孤立して行きます。

4、「助けて」と言うこと

現代社会の最も深刻な闇の一つは「子どもがある日誰にも何も言わぬまま自ら死んでいく」ということだと思います。なぜ、子どもが助けてとも言えぬまま死んでいく、そんな社会になったのでしょうか。子どもは、「助けて」と言っている。子どもは「いやだ」と逃げていい。にも拘わらずそれが出来ない。私は、そこに現代社会の最も深い闇を見る思いがします。子どもをそこまで追い詰めたのは、一体だれなのでしょう。それは、私たち大人であったと思います。大人は、少々頑張り過ぎたと思います。結果、その大人を見ている子どもたちは、容易には「助けて」とは言えない状態になったと思います。しかし、かくいう私も実は「助けて」と言えないひとりでした。私の長男は、中学入学と同時にいじめに遭い学校に行けなくなりました。2年間の不登校の中で心身ともにズタズタの状態になりました。その中で、私たち親子は沖縄県八重山の孤島、鳩間島に巡り合いました。その時、「助けてください」と言えた私たち親子は、まさに九死に一生を得たのでした。(このことについて詳しくは、拙著「助けてと言える国へ」奥田知志・茂木健一郎共著 集英社新書をご覧ください)

今、NPO法人北九州ホームレス支援機構では、子どもたち、若者たちに対する新たな取り組みが始まっています。まさに、ロータリーが目指しておられる「青少年奉仕」の取り組みです。子どもたちに対しては、「生笑一座」という一座を興し学校などで講演をしています。子どもたちに「助けてと言っているのだ」「生きていればいつか笑える日が来る」というメッセージを元ホームレスの自立者たちが語りかけます。さらに、若者の生活支援・就労支援においては「笑える出し巻玉子」の工房を開きました。現在、若者たちが自立をめざし毎日出し巻玉子を焼いています。今後は、工房がある地域課題である、高齢独居世帯の支援を組み合わせた就労支援事業として展開する予定です。

誰もが「助けてと言える社会」。公平な社会とは、そのことを前提とした社会なのだと思います。

どうか、今後もロータリアンの皆様には、このような生活困窮者支援の働きを覚えていただき、お支えいただければ幸いです。「公平な社会」の実現に向けて共に歩ませて戴ければ幸いです。

以上